

出題分析			
試験時間	60分	配点	60点
		大問数	2題
分量 (サンプル問題との比較)	減少	難易度変化 (サンプル問題との比較)	難化
<p>【概評】</p> <p>2025 年度入試からの新方式。2023 年 4 月公表の「サンプル問題」と比較すると、大問数は同じ 2 題、本文と全体の総ページ数はやや減少。設問構成は、各大問につき 7~8 設問、そのうち論述 (30 字もしくは 200 字) が 1 設問ある以外は全てマークシートで、これは「サンプル問題」でも今回の本試験でも同様。難易度は、「サンプル問題」と比較して難化。「社会科学 (部)」の「総合問題」ということで、出題者側にも苦心の跡が窺えたが、早大レベルの受験生が 60 分で解くのに適した分量・難易度であったとは到底言えず、不明確・不慣れ・不親切な印象を外部に広く与える結果となった。「社会科学の方法論」に焦点が当てられた設問が多かったが、一部の設問中の文言が言葉足らずで、文の意味・出題者の意図が確定できない不備も目立ち、本文自体の難解さとも相まって、多くの面で受験生を苦戦させた。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	<p>歴史解釈と自然実験 (本文は、D. アセモグルなど (著)、小坂恵理 (訳)「フランス革命の拡大と自然実験——アンシャンレジームから資本主義へ」、『歴史は実験できるのか』慶應義塾大学出版会、2018 年所収の文章より。なお問 7 で別の論文からの引用もあり。)</p> <p>【25.3.4 追記。問 7 は大学公表の解答例と異なっていた。別紙「解答例」参照。】</p>	<p>歴史理解への「自然実験」的アプローチの方法論を紹介した文章が題材。世界史・政治制度・経済発展・統計資料解釈などの要素を含む。問 1 は易しい。問 2 は本文「これらの点～」から始まる段落中心にまとめる。問 3 は、e の記述自体に誤りはないが、「自然実験」の手順に関わるものとして c が正解。問 4 は、本当に「侵略」が原因と言えるのかシベリアに判定する。問 5 は、図 I-4 の「プロイセン」がいち早く成文民法を採用していることなどから、改革は「プロイセンに譲渡」の地域群で最も早く進み、次に「侵略されず」の地域群で進んだことを読み取る。問 6 は、選択肢文中の各出来事の記述がいつのことなのか、時制の解釈に幅が生じるため別解の可能性もある。問 7 は、c が「子の数」と「母親の労働供給」の間に繋がりが見られない。なお労働市場で「供給」されるのは労働力。問 8 は独立した要素を見付ける。</p>	やや難

設問別講評			
II	<p>健康格差と正義 (本文は、N. ダニエルズなど (著)、児玉聡 (監訳) 『健康格差と正義——公衆衛生に挑むロールズ哲学』勁草書房、2008 年所収の文章より。)</p> <p>【25.3.4 追記。問 6 は大学公表の解答例と異なっていた。問 7 の論述の解釈と合わせて別紙「解答例」参照。】</p>	<p>この手の長文資料で頻出のロールズ哲学が題材だが、「健康格差」問題への応用が試みられている。立場は社会主義寄りのリベラリズムとさえ言える。問 1 は易しい。経済的文脈での「パイ」の語の使われ方に注意。問 2 は「ジニ係数」「回帰直線」の説明を丁寧に読んで判断する。問 3 は、例えば「地域 A」の「階層 1」の所得水準を仮に 100 と置くと、「地域 A」の「階層 2」以下は 70、49…となり、「地域 B」は「階層 1」から 50、35…となる。ここから「同程度の所得水準」などの比較が可能となる。問 4 は、最もストレートな記述である a を素直に正解とする。問 5 は e が、一見しても再分配政策でない分かる。問 6 は、このような過度の干渉主義では不都合を感じる者も出る、という意味で「多面的」。問 7 は 200 字論述で最後の設問だが、何を書くべきか、指示の文言には多義的に読める余地があり、非常に分かりにくい。本文末尾の段落を中心に考える。</p>	難
合格のための学習法			
<p>「社会科学の女王は経済学」という言葉もあるが、歴史学・政治哲学・統計資料解釈など、様々な学知が今後も総動員的に扱われていくと予想される。「基本的に知識不要の読解問題なのだから、現代文や小論文が得意であれば解けるだろう」とタカをくくっていると、題材や本文の難解さを前に痛い目を見る。数は少ないが「サンプル問題」と本試験の過去問(社会科学部だけでなく政治経済学部の「総合問題」を含む)を何度でも入念に研究し、秋頃に実施の模擬試験も確実に受けておく必要がある。日頃の勉強では、高校での「歴史総合」「世界史」や「倫理」「政治・経済」など、社会系の授業を大切にしておくことが重要。加えて、例えば社会科学系に強く文章も硬派なものが多い、中公新書の書籍などを習慣的に読んでおくことを強く勧める。2025 年度本試験では、フランス革命史・資本主義発展史・ロールズ哲学などの話題に予備知識を持っていた受験生が、ある程度有利だっただろう(ノイズになった可能性もあるが)。なおこうした「総合問題」方式には出題者側も相当に苦労しているようで、例えば出題者側にもヨーロッパ近代史の知識が必要だった大問 I では、設問中の地図の地名が英語・ドイツ語混じりで実は誤植もある、「侵略」の定義が曖昧、文中の「歴史的事実」を「仮想上のもの」とすることで実は無理が生じている記述がある、など、「世界史」に詳しい受験生であればあるほど首を傾げるであろうような怪しい箇所も見られた。</p>			